

SBJ

vol. 34

2015年5月14日発行

碩学舎ビジネス・ジャーナル
Sekigakusha Business Journal

対談

国民経済的関心からの 経済・経営史研究

宮本 又郎 (大阪大学 名誉教授)

岡部 桂史 (立教大学 経済学部 准教授)

平野 恭平 (神戸大学大学院 経営学研究科 准教授)



国民経済的関心からの 経済・経営史研究

インタビュー

宮本 又郎

大阪大学 名誉教授

岡部 桂史

立教大学 経済学部 准教授

平野 恭平

神戸大学大学院
経営学研究科 准教授

経営史研究との出会い

岡部 まず、先生の大学学部からの略歴、そして研究との関わりをおうかがいしたいと思います。

宮本 私は神戸大学経済学部に入学しまして、三、四年生では北野熊喜男先生のゼミナールを受けていましたが、実質的には卓球部に所属していたと言っただけだと思います。卓球部というのは月曜日から土曜日まで、毎日午後一時半から五時まで練習することになっていて、先輩たちは「ゼミナール以外の授業に出てはいけません。そんなものに出るようではいい選手にならないし、授業に出られないからといって単位を落とすようでは学生としても失格だ」なんて凄いいことを言っていました（笑）。ですから、ゼミナールだけは出席しておりましたが、午後のほかの授業はほとんど欠席となり、午前中の二科目ぐらいしか出席できなかったのです。つまり、勉学の面ではきわめて不真面目な学生だったのです。

学部の北野熊喜男先生のゼミは経済原論のゼミでしたが、北野先生は経済社会学的なことを教えておられました。北野ゼミというのはこの時代の神戸大学の経済学部では難関ゼミとされていて、勉強好きの人が志望していたのですが、私の場合はそうではありません。そのゼミナールに入ったのは、とくにこの方面の勉強をしたいと思っただけではなくて、実は北野熊喜男先生は

★1 北野熊喜男（きたの・ゆきお）。神戸大学名誉教授。社会経済学者。

★2 宮本又次（みやもと・またじ）。大阪大学名誉教授。専門は日本経済史、近世商業史。

★² 私の親父の幼稚園時代からの友達でしたので、神戸大学に入ったときから、何かしら北野ゼミに入ることが決められているような雰囲気だったので、それで入ったような次第です。基本的に理論のゼミナールだったのですが、私はあまり理論には強くなかったもので、★³ ロストウの★⁴ 『経済成長の諸段階』という本があり、それをめぐって卒論を書きました。その当時、ロストウの『経済成長の諸段階』は、いわゆる「近代化論」の一つの理論的な支柱になっていた本で、マルクシストが多かった日本の経済史界の主流においてはあまり評判のよくなかった本です。

★⁵ 大学院から新保博先生という経済史の先生に代わりました。新保先生は江戸時代が専門分野で、当時、経済史ではだんだん近現代の方に主流は移っていましたが、まだまだ江戸時代経済史研究も盛んだったので、江戸時代をやるということになりました。またこの点に関しては、経済史家だった父から、「関西では江戸時代をやった方が得だよ」と言われたことも影響しています。近現代についてはどうしても史料が東京に多いが、近世史、江戸時代をやるのだったら関西に地理的なアドバンテージがあると言われたのです。

次に江戸時代をやるのなら、何を中心的なテーマにするかということになります。が、やはりこの時代の経済の根幹に関わる

テーマをやりたいと考えました。ということとで、江戸時代では年貢米に関わる流通の問題が、江戸時代経済にとつては最も重要なことと考え、大阪の蔵屋敷と堂島の米市場の研究をやることに決めたのです。非常に単純な発想だったと言えます。

研究史としては、戦前以来、蔵屋敷、堂島米市場に関わる、いわゆる商業史の研究は非常にたくさん蓄積があったのですが、そういう商業史の研究は、当時マルクス主義的経済史の研究のなかでは重要視されていませんでした。私は、流通に関わる制度はやはり重要だと思ひ、それをきっちり実証的に研究する必要があると考えました。しかし同時に、制度の研究は静態的な制度の研究、記述的な研究だけでは面白くない、制度がどのようにワークしているのか、その機能分析をしたい、それを数量分析的にやりたいと考えたのです。ここには当時のアメリカの数量経済史の影響があります。制度の研究とその機能分析、そういうスタンスで蔵屋敷と堂島米市場の研究を行い、それが博士論文となり、★⁶ 『近世日本の市場経済』という私の最初の単行本となりました。

★⁷ 岡部 最初の著書に至るまでの過程で、北野先生や卒論で対象としたロストウの「近代化論」、コロンビア大学への留学などは、どの程度影響したのでしょうか。

★⁸ 宮本 間接的な影響を受けていると思いま

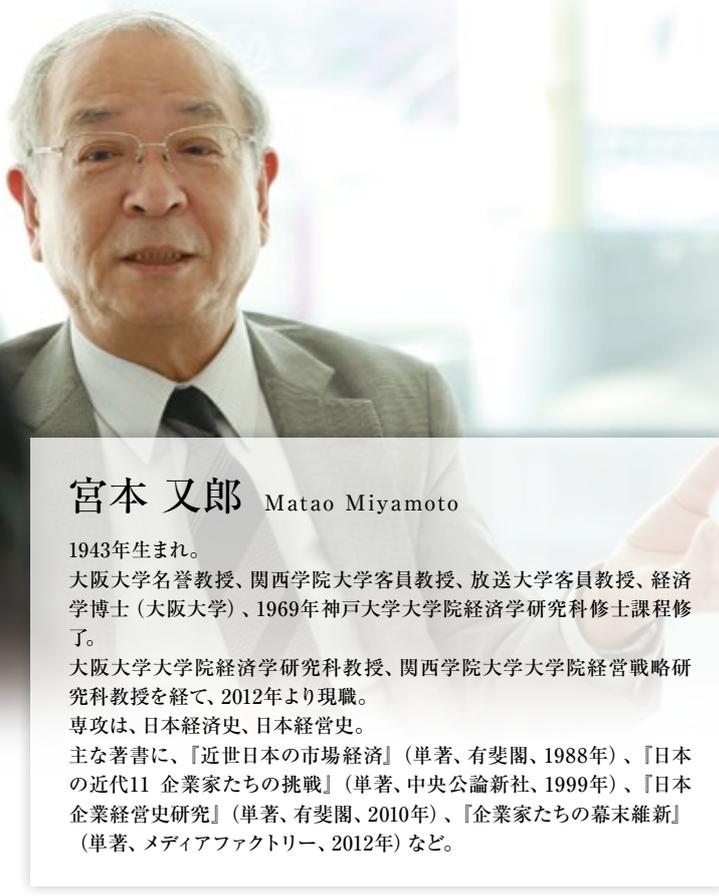
す。北野先生はやはり理論家だったので、僕が経済史をやるうとしたときに「おまえ、紙くず屋になるのか」と言われたのです(笑)。要するに文書史料の山に埋もれて、「重箱の隅をほじくるような紙くず屋になるのはだめだぞ」という意味ですね。それは先生のある種のレトリックだったと思います。綿密な実証研究は重要だけれども、「ロジックを重視しろ」ということですね、これは新保先生にも共通するところがありました。このお二人から、ロジック重視というのを学んだと思います。北野先生は、ゼミナールで学生が報告するとき、大体寝ているのです。多分本当に寝てはいなかったと思うのですが、寝たふりをしてるんです。あの当時は学生同士がよく議

★³ ウォルト・ホイットマン・ロストウ (Walt Whitman Rostow)。アメリカの経済学者。

★⁴ The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto. (Cambridge University Press, 1960)。日本語版は木村健康・久保まち子・村上泰亮訳『経済成長の諸段階 一つの非共産主義宣言』(ダイヤモンド社、1961年)。すべての社会は、伝統的社會、自立成長への離陸の準備段階、離陸、成熟への過程、大量消費社會の五つのいずれかの段階にあると説いた。

★⁵ 新保博(しんほ・ひろし)。神戸大学名誉教授。専門は数量経済史。

★⁶ 『近世日本の市場経済 大坂米市場分析』(有斐閣、1988年)。



宮本 又郎 Matao Miyamoto

1943年生まれ。

大阪大学名誉教授、関西学院大学客員教授、放送大学客員教授、経済学博士(大阪大学)、1969年神戸大学大学院経済学研究科修士課程修了。

大阪大学大学院経済学研究科教授、関西学院大学大学院経営戦略研究科教授を経て、2012年より現職。

専攻は、日本経済史、日本経営史。

主な著書に、『近世日本の市場経済』(単著、有斐閣、1988年)、『日本の近代11 企業家たちの挑戦』(単著、中央公論新社、1999年)、『日本企業経営史研究』(単著、有斐閣、2010年)、『企業家たちの幕末維新』(単著、メディアファクトリー、2012年)など。

論しましたから、先生は最初から学生のレポートにコメントしないで、最後に一言「君、今日の発表は原稿用紙三行でまとめるとどうなるの」と、そういうことを質問するのです。要するに、何を言いたいのか最後にはつきり言えということですね。そういうスタイルを学んだというか、影響を受けたと思います。

岡部 先生も大学院の演習でも常に同じようにおっしゃいましたね(笑)。

宮本 問題設定と結論をはつきり言えということですね。新保先生もよく似ていて、私が最初に論文を書いたときに「結論に代えて」「結びに代えて」などという言葉を使ったら、「そんな結びはない」と先生は言うのです。「『代えて』なんて、逃げるのはだめだ。『結び』にしなさい」と(笑)。二人はその点で共通していましたね。

経営史と経済史

岡部 先生は経済史と経営史の違い、あるいは両者の関係性をいろいろな場でお話されていますと思います。最近刊行された

★7 『経営史学の歩みを聴く』⁷ の中では、「企業にとって良いことでも、国民経済にとって悪いことだったら、善とは言えない」とおっしゃっています。これは、ミクロとマクロ、個と全体のバランスが重要だということを常に問うている先生の姿勢が現れて

いると思うのですが、これもやはり学部時代の影響でしょうか。



宮本 経済学部身者と経営学部出身者とは、ちょっと違いがあるのかもしれませんが、僕は経済学部出身だったので、どうしても「国民経済的観点」から経済やビジネスを学ぶことを教えられたような気がします。マクロの立場から、経営史を勉強するということですね。

あるシンポジウムで経営学畑の先生(経営史の人ではない)が「私は学生に教えるときに、経営学というのは企業にとってよいことは何かというのを追究しているのであって、それが国民経済にとって仮に悪いことであっても、それは関係ないという教え方をしています」と言いました。それ

は非常に明快な立場で、それはそれでいいと思うのですが、私はそういう立場に立っていません。企業経営にとってよいかもしれないけれども、マクロにとってはよくないとすれば、それは評価しないということですね。ミクロとマクロは多くの場合、一致すると思うのだけれども、長期相対取引、メインバンクシステム、日本の雇用関係など、日本の経営と呼ばれるものの諸要素のミクロの評価とマクロの評価は一致しないかもしれない。不況期の賃下げなども、そういう問題ですね。こういう場合には、私は基本的にはマクロ的立場に立って研究したいということです。

平野 そうするとやはり、『経営史学の歩みを聴く』にも書かれていましたが、経済史のために経営史をやっているというのが、最初から今までの立場でしょうか。

宮本 普通は研究対象によって、経済史と経営史を分けるでしょう。マクロをやるのが経済史で、企業を対象にするのが経営史という分け方なのです。その対象で分けるというのも一つのやり方だけれども、むしろ研究目的で、何に関心があるのかによって分ける方が正しいのではないか。これは実は、阪大におられた熊谷尚夫先生が、経済学と経営学は対象で分けるよりも、何を目的にして研究しているかによって分けるべきだと書いておられたことに啓発を受けています。

★7 経営史学会編『経営史学の歩みを聴く』(文真堂、2014年)所収の「宮本又郎先生インタビュー」。

★8 熊谷尚夫(くまがい・ひさお)。大阪大学名誉教授。専門は厚生経済学、経済政策。

平野 設備投資一つ見ても、高度経済成長のメカニズムを説明するために民間設備投資で企業を取り上げるのか、それとも企業の技術革新を見るためにその設備投資を取り上げるのかというのは、経済史、経営史の重みが違ってきますよね。そういうところで、どちらに自分の比重があるのかで選んでいくということですね。

宮本 もちろん経営史的立場が悪いと言っているのではなく、それは重要だと思えます。実際、自分の書いてきた経営史でもそういうスタンスで書いたものもありますので(笑)。

岡部 日本の経済学部や経営学部では、明確に経済史と経営史を切り分けしないで、教えている先生が多いように思います。社会経済史学会と経営史学会も、所属会員の多くが重なっていますが、言い方は悪いですが、その「曖昧さ」が日本の経済史・経営史研究のよさと言えるのでしょうか。

宮本 かもしれませんね。お二人はどう思われますか。企業経営にとってはよいことなのだけれども、マクロにとってみればどうかという問題。

岡部 高度成長期の公害問題が典型的ですね。その頃から明確に経済成長と国民福祉を両立させるシステムの構築が課題になってくるのではないのでしょうか。しかし、近世からの近代化過程をみれば、経済成長に圧倒的に比重を置く、言い換えれば、福祉

に目を向けるためには、前提となる経済成長を実現しなければ、どうにもならないという時代もあったと思います。長期的な歴史的背景を踏まえて考える場合、経済史は有効なツールだと思えますが、経営史でどのように議論するかは難しい課題ですね。

平野 経営史となると、企業の利益極大化というところさえ考えておけばそれでいいのかというところが気になります。

岡部 これまで経営史では、企業や産業の発展過程を非常に緻密に研究してきたと思うのですが、発展の結果として何を生み出したのか、社会にどのような影響を与えたのかまで、踏み込んで議論してこなかったように思います。今回、宮本先生のお話をうかがっていると、^{★9}「1からの経営史」も、多くの企業家や産業、企業を取り上げていますが、発展や成長の側面のみならず、置いていたような気がします。

平野 僕が大学院生のときに桑原哲也先生から言われたのが、経営の学部や大学院で歴史を取り上げる人は、企業の経営のところは割と細かく調べてくるけれど、その企業のところだけ、その企業が何をやっているかという断片だけを切り取って、それだけで話を書いて、論文として「完成した」「経営史だ」と言っていることが多いと。けれども、そうではなくて、その切り取った部分が全体のなかでどのような位置付けにあるのかということなども、本来しっ

かりと押さえたうえで論文というものに仕上げないといけない。だから本当は経営学部でも経済史をもっと学ぶべきであるということでした。それで僕たち院生に大阪大学の経済史・経営史のコア科目を受けに行^{★11}くように言われました。

そういう意味では、経営学部では全体のなかの位置付けがちよつと弱くなるのかなど、経営史と経済史のバランスがうまく取れていないところがあるのかなと思います。自分を振り返ると、最初に宮本先生がおっしゃられたように、経済史のための経営史という立場でうまく関連付けながら理解していくという方がやりやすかったという気がします。



宮本 今、平野さんがおっしゃったことは、時代の文脈で考えるという話にもつながると思います。たとえば松下幸之助さんが最初に二股ソケットを作った、そういう話は今日の経営の観点からするとたいした

★9 宮本又郎・岡部桂史・平野恭平編『1からの経営史』(碩学舎、2014年)。

★10 桑原哲也(くわはらは・てつや)。神戸大学名誉教授。専門は経営史、国際経営。

★11 大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程で開講されているオムニバス形式の経済史・経営史の基礎科目。

ことがないことですよね(笑)。「何だ、その程度の話」ということになる。けれども、それをあの大正時代の文脈のなかで考えると、その意義が分かるということですね。単に二股ソケットの話ではなくて、松下幸之助の企業者活動の歴史的意義を考へることができる。時代背景を抜きにして、松下幸之助がスピナーアウトしてやったということだけでも面白い話ではあるけれども、そんな話はざらにある。もう少し歴史の文脈で考えると、違った部分が見えてくる。経済史家の方はこの「時代の文脈」「絶対年代」を重視するのではないでしょうか。

「市場と企業」

岡部 先生が経済史家として、最初にまとめられた単著が『近世日本の市場経済』になります。他方で企業家史も同時並行で進められてきたと思います。江戸時代の商家や商人たちの話は、経済史家としての先生とは、別のロジック、立場からスタートされたのでしょうか。

宮本 あまり直接的なつながりを意識せずやったところがあるところですね。あまり真剣に考えて選択したわけではありません。これには父の影響があります。父から「とにかく、若い間は、先生や先輩から言われた仕事は断るな、全部引き受けろ」と言われたんですね。若いうちは自分

の領域を広げた方がいいということですね。もちろん、非常にしっかりした研究者は長期の研究プランを描いて、これをもって、次にあれをやつてと、そのプラン通りに研究を進めていく、そういうことができます。もちろんよいのだけれども、多分おまへはできないだろう。むしろいろいろなことをやっているうちに何か面白いテーマが見つかるはずだ。全部面白くなることはないだろうけれども、他律的に与えられたテーマをやつていくと、それを深めればいい、最初に自分から間口を狭めない方がいいと言われたのです。ですから、こういうやり方でいろいろな仕事をしていると、本業の仕事の邪魔になることも実際にはあったに違いありませんが、自然と芸域が広がったのではないかと思えます。それは教えるときには非常に役立つと思えます。

やはり、経済史や経営史の授業で、たとえば30回授業をやるとすると、自分の研究テーマに関わった授業するのは数回ではないですか。あとはほとんど自分の関係のないことを話しているわけですね。いろいろな研究をやっているということは、それに関連してさまざまな専門分野の文献に遭遇しているわけですから、役に立つし、ヒントが得られます。違う分野と思っているものが、実は自分の研究の資料に使えるものがあつたり、研究手法で使えるものがあ

る。そういう意味では企業家の研究や江戸商家の研究もあまり直接に米市場の研究とは関係ないかもしれませんが、間接的には役立ったのではないかと思っています。たとえば、鴻池善右衛門家など大阪の両替商などは米市場と深い関係がありますから、ここで米市場研究と商家研究の接点があつたといったようにです。

岡部 先生の研究の軸としては、堂島の米市場の研究があつたということですね。

宮本 ええ。市場と企業というところだつたのではないかと思えます。逆に一貫してやらなかったことは農業史、農村史です。戦後の日本経済史研究のなかではやはり、ものづくりが経済にとって最も重要なことであつて、とくに江戸時代史では、私が大学院に入った当時でもまだ、農業史、農村史のウエイトが大きかったと思います。それに対して、マルクス経済学の影響がもしませんが、流通史や商業史、金融史、商家経営史は何となく、軽んじられていました。私はあまのじゃくで、むしろそのあたりをやりたくなつたのです。

岡部 では、かなり意識して近世の流通や商業、商家などに注目されたということでしょうか。

宮本 昭和30年代ぐらいまでは、日本の経済史学界では「救うべからざる流通主義」というような言い方をされてきましたね。要するに「流通などの研究したって何も分

からない」というような言い方ですね。こういう立場の人は、生産が基本と考え、経済の変化というものは、まず基礎の生産が変って、それにしたがって、商業、流通というものが変化していくと考える、商業、

流通から変化が生じてそれが生産に影響を及ぼすことは基本的に少ないと考えるわけです。これはある種のドグマであって、そういう立場からすると、江戸時代に堂島米

市場の仕組みがどれだけ発展しようと、両替商の大名金融のシステムがどれだけ発展しようと、それは江戸時代全体からすると領主経済の話であって農村経済には関係ないということになります。私はそういう

考えには同調できず、むしろ流通や商業の変化が生産構造に影響を及ぼすということもあるのではないかと、そういう側面の研究をしたいと思ったのです。

岡部 関西と関東の学風の違いも大きかったのでしょうか。関東はマルクス主義経済史の本流と言っていると思いますが、当時の関西はまったく違った展開を見せていたように思います。

宮本 そうですね。いわゆる本庄栄治郎学派というのはノンマルクス主義ですから。「反マルクス」ではなかったと思います。私の父・宮本又次や、その門下生で阪大の経済史の教授となられた作道洋太郎先生や原田敏丸先生ら本庄栄治郎先生の流れを汲む経済史家たちは、マルクス主義的フ

レームワークで設定された問題意識とや距離をおいて、実証主義史学を標榜していました。既成の理論にしたがって歴史を解釈するのではなく、根本史料による研究が大事だという立場であつたわけですね。

岡部 先生より一世代上の関西の研究者は、関東の研究者とは、異なる視角で研究に取り組んでいたということですね。

宮本 そう思いますね。本庄栄治郎学派はそうかもしれませんね。いわゆる「日本資本主義論争」などは少し距離をおいていたと思います。

岡部 神戸大学の新保先生はどのような立場だったのでしょうか。

宮本 新保博先生はちょっと違うのです。新保先生は慶應出身ですので関西の経済史の学派ではないと思います。新保先生も若いころに書いている論文はマルクス主義的でした。しかし、神戸大学に移ってから変わつたようです。

岡部 土地柄なのでしょうか(笑)。

宮本 いや、何か途中で疑問を感じられたようです。先生は地主制研究などをおやりになりましたが、ほかの地主制研究者と違って、物価史や数量史的にやろうとされました。当時の地主制研究では、日本では富農経営という資本主義的農業経営が発達しなくて、寄生地主制経営となつてしまつた。この農業における資本主義発達の遅れが、すなわち封建的土地所有が残つ

たところが、日本経済全体における資本制の遅れにつながつたという説(講座派的解釈)が強かつたのですが、新保先生は寄生地主制を必ずしも封建的土地所有とは捉えない、すなわち資本主義発展の遅れを示すものとは捉えないという議論を展開されたのです。ただ、新保先生は関西の経済史と少し違ふところがあつて、比較的には理論重視だつたと思います。私は他方で、実証主義の本庄学派の本流を自認されている作道先生や原田先生にも、学生時代からいろいろと指導を受けていましたので、この意味で両方の影響を受けていると思います。

日本経済史・日本経営史研究への取り組み

岡部 1980年代の終わりから90年代にかけて、先生は日本経済史や日本経営史のテキストを編者の一人としてまとめられています。そのプロセスを少し説明していただけますでしょうか。

宮本 岩波書店の『日本経済史』はもともと数量経済史(QEH: Quantitative Economic History)研究会というのがあつて、これが主体となつて編集したものです。QE Hというのは当時、一橋の梅村又次先生、東大の中村隆英先生、新保先生、慶應の速水融先生、西川俊作先生、一橋の尾高煌之助先生、安場保吉先生、といわれわれより20歳ばかり上の先生と、それから少し若手の斎藤修さんや、猪木武徳

★12 本庄栄治郎(ほんじょう・えいじろう)。京都大学名誉教授。専門は日本経済史。

★13 作道洋太郎(さくどう・ようたろう)。大阪大学名誉教授。専門は日本経済史・経営史。

★14 原田敏丸(はらだ・としまる)。大阪大学名誉教授。専門は日本経済史。

★15 自己の所有地において自ら資本主義的農業経営を行う農民。

★16 農地の所有者が自身で農業経営を行わず、小作人と呼ばれる農民に土地を貸し付け、農作物あるいは貨幣を小作料として徴収する制度。

★17 『日本経済史』全八巻(岩波書店、1988、1989年)。幕藩制成立期から高度経済成長の終焉に至る400年近くの日本の経済発展の歴史を収めている。

★18 梅村又次(うめむら・またじ)。一橋大学名誉教授。専門は農業経済学、日本経済論。

★19 中村隆英(なかむら・たかひさ)。東京大学名誉教授。専門は日本経済論、経済史。

★20 速水融(はやみ・あきら)。慶應義塾大学名誉教授。専門は歴史人口学、日本経済史。

★21 西川俊作(にしかわ・しゅんさく)。慶應義塾大学名誉教授。専門は計量経済学、数量経済史、労働経済学。

★22 尾高煌之助(おだか・こうのすけ)。一橋大学名誉教授。専門は労働経済学、日本経済論、経済発展論。

★23 安場保吉(やすば・やすきち)。大阪大学名誉教授。専門は経済発展論、比較経済史。

さん、山本有造さん、それに私など、そういうメンバーで組織されていた研究会です。当時、アメリカでクリオメトリックス (Cliometrics)、つまり数量経済史という経済史の研究手法が盛んとなっていたのですが、その影響を受けて、数量的手法を駆使して日本の経済史の再解釈を図ろうというのがこの研究会の趣旨でした。もっとも、エコノメトリックスをふんだんに使ったアメリカのクリオメトリックスと比べると、日本の数量経済史は、従来の経済史研究よりも統計データを多く使うといった程度のものでしたが、通説破壊につながる斬新な研究が少なからずありました。

速水融先生に言わせると、明らかに仮想敵国があつて、講座派がそれだったようです。数量経済史研究会のメインの研究領域は江戸時代から明治時代へ、すなわち近世から近代への移行期だったのですが、毎年二回ぐらい研究会を開いて、その都度『数量経済史論集』という論集を出版、計四冊出版したのです。この実績を踏まえて、中村隆英先生が岩波書店と交渉されて、数量経済史研究会主体で日本経済史の講座本を編集することになり、できたのが八巻本の『日本経済史』です。

この岩波『日本経済史』の基本テーマは、当時、高度経済成長が終わりつつあった時代ですが、「日本の高度経済成長とは何だったのか」ということでした。平たく

言えば、江戸時代から1980年ぐらいまでを見通して、何が高度経済成長を貫いている基本的要因なのかを追究することが、基本テーマだったと思います。個々の巻にはいろいろなテーマが取り上げられていますが、ライト・モチーフはこれだったと思います。イクスプリシットに書いてあるわけではないけれども、「高度経済成長」は決して第二次世界大戦後に限られる現象ではなく、江戸時代からの継続的歴史現象であるということを主張していたと思います。言い換えれば、日本の成長体質を歴史的に考察したということになるでしょう。



岡部 私の世代になると、大学院進学にあたって、1988年刊行の岩波『日本経済史』を最初に読んでという感じでしたから、岩波『日本経済史』が日本経済史研究の基本書という位置づけになっていたと思います。

宮本 その後、東大の石井寛治先生、原朗先生、武田晴人先生の編集によって東京大学出版会から六巻本の『日本経済史』が出版されましたが、憶測するに、編者の方には「岩波日本経済史がスタンダードになったら困る」というお考えがあったのかもしれないですね(笑)。

岡部 岩波『日本経済史』には、石井先生や原先生の下で学ばれた阿部先生や沢井先生なども参加されていますが、阿部先生や沢井先生からみて、違和感は無かったですでしょうか。阿部先生は数量経済史研究会のメンバーのお一人だったと思います。

宮本 阿部さんたちはそういう意識があまりなかったかもしれませんが、お二人に聞いてみなければ分からないけれども、やはりそれは石井先生や原先生が編集される本に執筆を求められたら、断るわけにはないかないでしょう。

岡部 お二人とも両方に書かれていますね。続いて『日本経営史』も岩波書店から翌年出版されました。

宮本 岩波書店は、経営関係の本をあまり出したことがないと思います。『日本経済

★24 斎藤修(さいとう・おさむ)。一橋大学名誉教授。専門は比較経済史、歴史人口学。

★25 猪木武徳(いのき・たけのり)。大阪大学名誉教授。専門は労働経済学、経済思想・経済史。

★26 山本有造(やまもと・ゆうぞう)。京都大学名誉教授。専門は数量経済史、日本経済史。

★27 1960年前後から起り、主として統計数量に依拠し、経済理論や国民所得会計の枠組みを使いながら経済史の再構成を図ったもの。

★28 日本資本主義論争において労農派と論争し、日本資本主義の本質は軍事的半封建的性格にあると主張したマルクス主義者の一派。

★29 『数量経済史論集』全四巻(日本経済新聞社、1976(1988年))。

★30 石井寛治(いしい・かんじ)。東京大学名誉教授。専門は日本経済史。

★31 原朗(はら・あきら)。東京大学名誉教授。専門は日本経済史。

★32 武田晴人(たけだ・はるひと)。東京大学大学院経済学研究科教授。専門は日本経済史。

★33 『日本経済史』全六巻(東京大学出版会、2000(2010年))。

★34 阿部武司(あべ・たけし)。国士館大学政経学部教授。大阪大学名誉教授。専門は近代日本経済史・経営史、比較経営史。

★35 沢井実(さかい・みのる)。大阪大学大学院経済学研究科教授。専門は日本経済史、日本経営史、近代日本産業技術史。

★36 『日本経営史』全五巻(岩波書店、1995年)。江戸期から現代までの日本企業の経営の変遷過程を取っている。

史』の編集担当であった岩波の杉田忠史さんのおかげで、出版にこぎ着けることができました。経営史学会では1970年代後半に日本経済新聞社から『日本経営史講座』というシリーズを^{★37}中川敬一郎、宮本又次編で出版していますが、それから20年ぐらい経ったので、新しい経営史講座を、ということでご企画されました。全五巻ですが、各巻の編者は比較的年配の研究者と若手の研究者がコンビとなりました。第一巻が^{★39}安岡重明・^{★40}天野雅敏、第二巻が私と阿部武司、第三巻が^{★41}由井常彦・^{★42}大東英祐、第四巻が^{★43}山崎広明と^{★44}橋川武郎、第五巻が^{★45}森川英正と^{★46}米倉誠一郎ですね。僕と阿部さんは年齢が近いですが、安岡、森川、山崎、由井がシニア、そのほかが若い世代ですね。

岡部 刊行された頃は、日本の経営が全盛の時代ですね。

宮本 このシリーズは、まさしく「高度経済成長」の経営史版をやるうとしたものでした。ですから、日本の経営はどのような形で形成されてきたのかというのがメインテーマでしたね。はっきり言えば。

平野 時代の流れとびったり。

宮本 そうそう。日本の経営が高く評価されていた時代だったから、日本の経営の歴史的ルーツを探るとというのが基本的なモチーフだったと言えます。

岡部 1980年代後半のバブル全盛期に企画されて、執筆されたと思うのですが、

その時代の影響はあったのでしょうか。
宮本 あったでしょうね。ただ、森川・米倉編の最後の巻は『日本の経営を超えて』が書名となっています。ここには「日本の経営」の将来性に対する疑問も少し入っているとあります。しかし、全体としては、あのシリーズは基本的には日本の経営がどうやってできたのか、という話だと思えます。

岡部 私は1993年春に大学に入学しました。入学当初は、バブル経済の余韻も少しあったように思いますが、2年、3年となる内に、バブル経済の終わりが明確となってきました。その後、大学院時代からこれまで低成長時代を生きています。現在40歳前後の私たちは、経営史の標準的な教科書として岩波『日本経営史』を読んだ世代になるわけですが、大学で教える立場になつてからは、高度成長は遠い過去となり、日本の経営も見直してばかりのような気がします。現在から振り返って、岩波『日本経営史』や『日本経営史』で貫かれた「成長史観」について、宮本先生はどのように考えていらっしゃるでしょうか。

宮本 それに関連しては、近年スピーカーとして呼ばれた社会経済史学会での経験をお話しましょう。一つは2011年に開かれた社会経済史学会の「第1回次世代研究者育成ワークショップ」でのことですが、私は「日本近世と市場経済」というテーマ

で、大学院生や若手研究者に対して話をしました。詳しい内容は省略しますが、市場経済の展開との関連で、江戸時代の経済発展なり経済成長の話をしたわけです。ところが、大学院生や若手研究者の関心はあまり高いようには見受けられなかった。そこで、私は出席者に問いかけてみました。アメリカのダグラス・ノースという経済史家は、アメリカ経済史の教科書的な書物である^{★48}*Growth and Welfare in the American Past*の冒頭のページで、経済史の課題は社会全体の経済がどのように成長あるいは、停滞や低下したかを研究すること、その間にあって、人々の間の相対的福祉がどのように変わったか、すなわち分配がどう変わったかを研究すること、この二つに尽きると言っている。私も確かにそう思うのであって、具体的研究テーマでは明示的ではないにせよ、経済の究極のテーマは成長と分配の二つに帰することができると思う、私は成長の方により関心をもっているし、マルクス主義経済史家は分配の方に関心があると思うのだが、皆さんはどうか、このどちらに興味をもっているのか、と聞いたのです。そうしたら出席の若い人たちにはもう一つピンとこないようで、「どちらでもありません」という答が多かったです。

「じゃあ、究極の研究テーマは何なの」と聞いたのですが、あまりはっきりした答えは返ってこなかった。

★37 『日本経営史講座』全六巻（日本経済新聞社、1976～1977年）。

★38 中川敬一郎（なががわ・けいいちろう）。東京大学名誉教授。専門は経営史。

★39 安岡重明（やすおか・しげあき）。同志社大学名誉教授。専門は日本経済史・経営史。

★40 天野雅敏（あまの・まさとし）。神戸大学名誉教授。専門は日本経済史。

★41 由井常彦（ゆい・つねひこ）。明治大学名誉教授。専門は日本経営史。

★42 大東英祐（だいてう・えいすけ）。東京大学名誉教授。専門は経営史。

★43 山崎広明（やまざき・ひろあき）。東京大学名誉教授。専門は日本産業史・経営史。

★44 橋川武郎（きつかわ・たけお）。一橋大学大学院商学研究科教授。専門は日本経済史・経営史。

★45 森川英正（もりかわ・ひでまさ）。法政大学、横浜国立大学、慶應義塾大学、豊橋創造大学教授を歴任。専門は日本経営史。

★46 米倉誠一郎（よねくら・せいいちろう）。一橋大学イノベーション研究センター教授。専門は経営史。

★47 ダグラス・セシル・ノース（Douglass Cecil North）。アメリカの経済学者。新制度派経済学を代表する人物で、1993年に経済史の研究者として初めてノーベル経済学賞を受賞。

★48 *Growth and Welfare in the American Past: A New Economic History*. (Prentice-Hall, 1966)

それから、もう一つは今年（2014年）の社会経済史学会全国大会での「いま、成長の経済史を問う」というパネルです。これは橋本寿朗^{★49}さんの追悼記念とも言えるべきパネルで、彼の親友であった武田晴人さんが主宰したものです。ここで、今後の日本経済についても話題となつて、武田さんたちは「脱成長」というか、もはや経済成長は必要ない、あるいはかえってマイナスだという考え方でしたが、私は、高度経済成長のような高率の成長は無理だが、財政問題、高齢化時代における福祉問題などを考えると成長は必要、とくに一人当たりGDPの成長は必要で、少なくとも現在の生活水準を維持するためにも、成長を政策目標から外すと、登り坂道でエンジンを止めて、自動車がずり落ちるようなことになるのではないかと述べました。

もちろん分配問題、人々の相対的ウェルフェアの問題は重要なことですが、成長に関心をもつ人は、成長がなければ、分配問題の解決も難しいと考えているのではないのでしょうか。全体のパイを増やすことによって、多くの人々が「win-win」になる可能性があるということですね。

岡部 全体のパイが増えれば、一人当たりも増えていく。さらには社会全体もよりよい方向に向かっていくという考えですね。

宮本 全体のパイを増やすという話は、もちろん高度経済成長のように10%の成長は

無理だけれども、マイナス成長は困るという話ですね。それは、私たちの世代の多くに染み込んでいる考えと思うのですが。お二人は、どうですか。



岡部 私の世代、30代半ばから40代半ばの世代は、成長史観の方がしっくりくるのではないのでしょうか。1974年のオイルショック前後に生まれた世代になるわけですが、小中学生でバブルを経験した世代ですね。他方で直感的な印象になります。私たちの世代を間に挟む30代前半以下と40代後半から50代の世代には、成長史観に懐疑的な先生が多いような気がします。

平野 僕も多分、成長史観の方だと思います。

宮本 結局、今経済史や経営史の究極のテーマは何なのかということですね。先ほどのワークショップやパネルで、「では、何がテーマなのか」と聞くと、答えが出てこないのです。

平野 「成長と分配」に代わるキーワードです。

宮本 「環境」、これは割によく出てくる答えですね。しかし、環境はある意味で分配の問題でしょうね。

岡部 キーワードとしては環境に並んで「消費」もよく出てきます。

宮本 消費を問題にするのは何なのかな。消費がよくなるという話は成長の話につながりますね。あるいは今日における過剰消費を問題にするのは現在世代と将来世代の間の分配に関わるということでしょうか。または生活の満足度という観点でしょうか。ただそれらも結局は、成長と関係があるのではないのでしょうか。経済の「成長」ではなく、「質」の問題だと言う意見もあるかもしれませんが、成長を問うことに、質の問題が入っていないとは必ずしも言えないと思いますね。

平野 そうですね。確かに「環境」「消費」は最近よくキーワードとして出てきていますが、それも成長と分配に入ってくる問題でもありますね。大衆消費社会に向かっていくというのも、成長が前提ではないのでしょうか。

★49 橋本寿朗（はしもと・じゅろう）。東京大学社会科学研究所教授、法政大学経営学部教授を歴任。専門は日本経済史。

岡部 では続いて、ミネルヴァ書房の『講座・日本経営史』に移りたいと思います。先生は第一巻を編者としてまとめられています。

宮本 第一巻『経営史…江戸の経験』については、やはり江戸時代と近代との連続性、断絶性を問うということが通奏低音のテーマですね。連続性、断絶性のどちらに与するかということではなく、何が連続して、何が連続していないか。逆に言えば、江戸時代の遺産は何であり、何が足りなかったのかを論じようということを執筆者の皆さんに申し上げました。その意味を込めて、各章のタイトルには近代的なチームをかなり使うことにしました。「市場と企業」「マーケティングと物流」「金融ビジネス」などですね。批判もあるかもしれませんが。

岡部 確かに近世を論じる際に、近代以降、あるいは現代的なチームを使ってよいかは、意見が分かれそうです。

宮本 そうでしょう。江戸時代に「マーケティング」という言葉を使っているのかね。あえて使ったのは、writing history backwards、つまり「後ろから歴史を読む」という手法もあってよいのではないかと。歴史の研究書ならば邪道かもしれないが、この本は啓蒙書の意図も込めているから、こうした方が一般の読者にとっては興味深いのではないかと、このようにやらない

と歴史書というのは読んでもらえないのではないかと意識してのことです。だから、批判もあると思います。

経営史研究における二つの視点

岡部 先生は2010年に『日本企業経営史研究』という単著を刊行されました。今回の対談でも途中で話が出ていましたが、いろいろな仕事を引き受けられて、その成果を一書にまとめられています。

宮本 そうですね。これはまとまりのない本ですよ。論文集ですね。

岡部 一冊にまとまって通読すると、やはりまとまっている感じがするのですが。

宮本 『近世日本の市場経済』以来、機能分析をこだわっているところに一貫性があるかもしれません。経営史であっても数量データをよく使っているとか、そのあたりがあるいはそこぐらいが共通点かもしれません。僕は社史編纂にかなり関わりましたが、どの会社でも財務や経営の成果の分析をきっちりやれとやかましく言ってきました。だけど、不思議と思うのですが、最近、企業の方はむしろ、この点割合おどろきというか、通り一遍のことしか書きたがらないというように感じます。

岡部 「通り一遍」というのは、ストーリー性を重視した書き方ということでしょうか。

宮本 ストーリー性というよりも、個々の

史実の叙述に熱心だということですね。個々の製品開発の歴史とか、技術とか、施設の建設など、そういうことをものすごく、詳細に書くのです。もちろん、経営上非常に大きな意味があったら、それでいいのですが、技術的には画期的かもしれないけれども、その売上高や企業全体のなかでのウエイトなどは言及しないという記述が結構多いのです。個々のディテールは大事にするけれども、会社全体の経営に關することの記述が不十分ということですね。これは、多方面に多角化している事業部制のような組織構造をもっている大企業の社史に多い傾向ですね。

岡部 マクロ的に自分の会社を捉えず、ミクロにこだわってしまったということですね。

宮本 先日、日本経営史研究所の優秀会社賞選考委員会でもそのような話が出ました。大企業ともなると全体を見渡せる人が非常に少なくなっているのではないかといいことです。とくに社史を編纂、執筆する人は、その能力が必要なのだが、それが不足しているのではないかと、ということですね。叱られるかもしれませんが。

平野 なるほど。全体を見渡せないというところがあるから、組み立ても自然とそうなるでしょう。

宮本 そう。社長を経験したぐらいの人が社史をきちんと編纂すれば、あるいは積極

★50 『講座・日本経営史』全六巻（ミネルヴァ書房、2009～2011年）。

★51 『日本企業経営史研究 人と制度と戦略と』（有斐閣、2010年）。

★52 「優秀会社史賞」は一般財団法人日本経営史研究所が1977年から隔年に一回、日本で刊行された社史を対象に、優秀な社史を選考しているものであり、経営史研究者が選考委員となっている（現在の選考委員長は宮本又郎）。

的に関わればよい本ができると思います。

そういう人ではなく、総務とか企画とか広報とかの実務家レベルの人が編集責任者となつて、社内的一次稿は各部署の現場の担当者を書いてもらうことが多い。それら

の一次稿ファイルをガチャと集めるだけだ

と、部品は正確だけれども、全社的な経営のことはよく分からない、いわゆる「木を見て森を見ず」ということになってしま

います。優秀会社史賞選考委員会でも話題になったのですが、取締役会では財務や経営

成果の話ばかりしているのに、なぜ社史になるとそれが表に出てこないのかと

(笑)。

岡部 確かに多くの社史では、財務の話が

メインに出てくることは無いですね。

宮本 普通の財務屋さんはあまり社史に関

係しないということがあるかもしれない。

平野 その財務の話になると、読み手として数字ばかりになってしまう。

宮本 確かに。面白くないかもしれない。

平野 面白くないから、エピソードなどがたくさん盛り込める技術開発物語のような

方が受ける、というのも一つあるのですかね。

宮本 そうかもしれません。社史をやるのは、一人は会社全体のこと分かる人が

入った方がいいと思うし、最近では数字好きの人が絶対一人いた方がいいと思いま

す。やはり数字好きではない人は、きっち

りとデータをまとめてくれませんかね。

最初に基本的なデータは全部、エクセルぐらいで用意するとか、そういうことをやってくれると非常によいのですが。

平野 僕は院生のときから、東洋紡の社史

編集室によく出入りしていたのですが、宮本先生が「百年史」^{★53}を執筆されたときの数字のデータがたくさん残っているのです。

それらは後々僕たちが利用するときでも使えるものばかりで、すごく便利なのです。

宮本 一人、データマニアがいたのです。

平野 そのようですね。「百年史」の編纂後に、別冊のデータ集のようなものが作られていて、東洋紡という会社のデータに加

えて業界のデータも用意されており、その一冊を見たら自分で調べなくてもすむぐらい

いです(笑)。

宮本 しかし、その方は社史編纂のなかでは主流派ではなかったのです(笑)。私は

データの読み方をその方から教えてもらいました。ですから、彼は非常に貴重な存在

だったし、社史編纂終了後もデータをまとめてくれました。

平野 ああいうものは本当に資料として後々にも生きてきますね。最近の社史だと、そういうものが少なくなっているのでは

しょうか。

宮本 日本経営史研究所編纂の社史では、経営成果や資金調達のことを時代別編成

の各章の最後に記述するスタイルになって

いますが、損益計算書と貸借対照表の数字をざっと紹介する程度にとどまっていますね。このスタイルが影響しているのかもしれない。

岡部 データがきちんとしていると、多面的に経営成果が評価できる反面、数字で

ばつさり切られるので、会社としては嫌がるでしょう。

平野 そうすると、やはり社史を書くときは、ある程度執筆陣の独立性が重要ということですね。

宮本 もちろんあります。確かにそういうことをやると、経営状況が悪いときの話も

きちんと分析しないとイケないので、独立性が必要となります。

平野 社史の話題が出た関連になります

が、宮本先生はこれまで社史をたくさん執筆されていきますけれども、そのあたりのエ

ピソードをおうかがいしたいと思うので

す。

宮本 私は、経営史をやる人は社史の編纂、執筆に関わった方が絶対によいと思

います。一つは、とくに私たちのように会社勤めの経験のない者は、どうしても机上の

学問に終わってしまう危険性がありますね。ですから、企業の方と社史編纂、執筆

をめぐっている議論するというのは、ものすごく勉強になります。執筆にあつ

て、企業の方が言った通りに書いたら、私たちが参加している意味がまったくないと

★53 東洋紡績株式会社社史編集室編『百年史・東洋紡』上巻・下巻(東洋紡績株式会社、1986年)。



ないと思います。そうになると、われわれは単なる文章書き屋になってしまう。私たちは私たちの調査研究と知見に基づいて、原稿を書く。企業の方は、大学の先生が書いたのだから、それに手を入れてはいけななどと遠慮せずに、納得できないところは、「先生、これおかしいです」と言ってくれた方がいい。そこで両者で議論になると思うのですが、いつも企業の方が言っていることが正しいとは限らない、やはり客観的なデータや資料から見ると、どうしてもこういう解釈にならざるを得ないということになることがあります。

そういう場合に、議論することが非常によいことです。最終的には、企業人が言っていることが正しいこともあるし、われわれが言っていることが正しいこともある。企業の人は、自分たちの会社のことだから、自分たちが一番よく知っていると思っている、大学の研究者だろうと、ちょっと資料やデータを見ただけでは、本当のことは分っちゃいなと思うている節がある。こういう人たちに対して、「あなたたちはそう思っているかもしれないが、やはり私の言っていることが客観的には正しい」と説得しなければならぬ。そういう議論のやりとりの結果、「なるほど。先生のおっしゃる通りですね」と言ってくれるようこちらも勉強しなければならぬ。これがものすごくよい訓練となります。逆に、企業の人に指摘された場合、こちらが間違っていることも割に多いのですが、そのときには、あまりわれわれも頑なになつてはいけなと思います。時々、研究者でいますよね。絶対に譲らない人。それはやはりおかしい。向こうは長年その企業で働いているのだから、「先生、そう書いておられますが、どうも感覚に合わない」と言われたら、やはりどこかに問題がありそうなので、再検討した方がよいと思います。「さすが経営史の研究者」と、企業人を納得させる研究となっているかどうか、逆に、企業人からの指摘を素直に聞いている

かどうか、この緊張関係と協力関係、研究者としてはこれが社史において非常に重要なことだと思います。

対象企業と全然接触なしに、独立に経営史の論文を書いていると、好き勝手に書いていいわけだが、独善に陥る危険性もある。企業側からすれば、研究者が勝手にものを言っているということになってしまいます。これは残念なことです。最近のある自動車会社の社史からはそんな疑問を感じました。

この自動車会社に関する研究者の論文、著書は非常に多いのですが、この社史ではほとんど無視されていました。これはどういうことですかね。この会社については経営史、経営学などさまざまな分野から学術研究があるので、少しは、こういう学術研究を利用したり、言及して欲しかった気がしますが、ほとんど取り上げないというのは変な気がしましたね。学術研究が正しいが、間違っているように、企業としては関係ないということでしょうか。お互いに研究、見解の交流があってもよいと思うのですが。

平野 その企業の社史に携わる人たちに、経営学も含めてですが、経営史の研究成果にもう少し関心をもってもらい、それをうまく社史にも生かしてもらおうというのが大事なところでしょうか。

宮本 そう思いますけれどもね。ですか

ら、経営史研究者は機会があれば社史編纂に積極的に関わった方がよいと思います。研究の交流ということに加えて、企業の一

次史料、データにアクセスできるというメリットがあるからです。もつとも昔に比べて、社史で得た資料を使って論文を書くことについて制約が強まってきましたが。

岡部 最近では社史を執筆する場合、必ず書面で秘密保持契約を結んで、社史以外で企業の内部資料やデータを勝手に利用できないようになりましたね。

宮本 昔は社史をやったら、その後、私はそれに関連する論文を一〜二本書いていました。社史では経営史的には面白くても、書けないこと、あるいは、そこまで詳しくは書けないという問題がありますね。こういった問題について、自分の論文として書くということを何度かやりました。たと

えば、東洋紡のオリジナル母体である大阪紡績は創業当初には目覚ましい業績を挙げたが、数年経つと、業績が低下し、紡績トップ企業でなくなりました。その原因は何か、これについて深く掘り下げた分析をするのは社史になじまないの、私は「大阪紡績の製品・市場戦略」という論文でこれを論じました。社史編纂に関係していなかったら、書けなかった論文と思います。ただ、最近では社史編纂過程で得た情報や資料を、ほかに洩らしてはいけないという秘密保持契約を結ぶことが多くなりました

が、もう歴史的なものとなったことで、純学術的なことならば、多くの会社は、社史資料や情報の利用を許可してくれると思います。

岡部 先生がかかわった社史の中で、担当者として上手にコラボレーションできたという社史はありましたか。

宮本 東洋紡は非常に学術研究者を大事にする会社ですから、あまりわれわれに注文を付けませんね。逆に言うと、ちょっとおとなし過ぎますという印象もあります。基本的に学者の書いたものは尊重すべき、手を付けてはいけないというスタンスですね。私は「そんなに遠慮することはない。大切なことは、正確な社史を作ることだから、不満なところがあればドシドシ言っ下さい。われわれも大いに議論したい」と言っているのですが。

資料収集やその整理で感心したのはワコールでした。創業以来の文献資料や製品、ポスター、ビデオなど丁寧に保存されており、そのうえ、パソコンで資料検索が容易にできるなど、執筆する際に変えやすい勝手がよかったです。

廣田 社史というのは、かつてと今とはだいぶ位置付けが変わってきているような気もするのです。純粋に会社にとっての財産として残していく位置付け、どちらかというと対外的にもアピールしていく位置付けがありそうです。そういうところは変

★54

「大阪紡績の製品・市場戦略―大阪紡績経営史への断章」『大阪大学経済学』第35巻第1号、1985年6月（前掲『日本企業経営史研究』にも所収）。

わってきている感覚はありますか。

宮本 そうですね。昔は、要するに社史というものは会社の宣伝媒体の一つのようなものだから、悪いことは書かない。よいことばかり書くというものが多かったですね。これが第一段階。その後、やはりそれでは本当の歴史書と言えないから、きつかりとした歴史を残そうというふうにならわっていったと思います。大企業などではとくにそうだったと思います。とにかくそれは書かない、スキヤンダルは別としても経営の失敗や不祥事など、会社にとって都合なこともちんと書きましようというのが普通になってきたと思います。社史はやはり記録性が大事なので、多少分厚くなくても、重要な史実を洩れなく記述しよう、資料編も充実させようというのが多くなりました。これが第二段階ですね。

ところが、ここ10年ぐらいになると、また変わってきました。不況が長引き、リストラなどが行われるご時世ですから、社史にそんなにお金を使えない、記録が大事だからといって、誰も読まないような本を作るのはどうか。やはり、同じ作るのなら、リーダーブルなもの、見てくれの美しいものを作りましょうというムードになってきました。ですから最近では、薄くて、写真などが綺麗な社史が増えてきましたね。

第二段階と第三段階と両方要するというのが僕の考えで、やはり正史はきつちりと

歴史記録として残す。しかし、史実が網羅的に書いてある分厚い本を一般の人に読めというのはちょっと酷な話ですから、もう一つは薄い本でもいいから、リーダーな本、あるいはビデオなどでもいい、そういうものを作ってはどうかということです。もちろん、これには費用も手数もかかることなので、難しいかもしれませんが、社史の効用を考えると、目的別に社史を作る方がよいように思います。

さきほど話題にした自動車会社の社史ですが、世界有数の自動車メーカーにしては、慎まし過ぎるのではという印象です。世界の自動車経営史における自社の位置、フォードやGMとどこが違うのか、そういうことについては、内外の多くの研究者が研究してきたわけだから、同社としてはどのように考えているのかを、われわれは知りたいのです。こういった点について、ほとんど言及がないのは残念なことです。

先に述べた第二段階の社史では、業界トップ企業は自社のことだけでなく、業界全体についても言及する責任感のようなものがあつたように思います。それはよい伝統だったと思うのです。たとえばカゴメの社史というのは、日本におけるトマトを中心とした洋風料理の歴史のようなものを書いていきます。そのなかでカゴメがどのような役割を果たしてきたか。こういった

ことを書いていただくと、個別企業史を超えた価値がある、面白い本になる。経営史プラス産業史、経済史の文献になる。業界トップ企業はそのくらいのことをやって欲しいなと思いますね。

平野 昔の社史にはそういうところも割と丁寧書かれていたものがあります。業界やそれに関連することも広く書いていたが、最近それが無いものもあります。それともう一つ、社史ではライバル企業のこととはあまり書かないというのをよく聞くのですが。

宮本 確かに、同業他社のことは書かない、とくにそれを攻撃したり、悪口は公言しないというのが日本の産業界ではマナーとなつていていると思います。しかし、実際問題としては、常日頃、企業はライバル企業を意識して行動しており、戦略もそれを念頭に置いて立案しているわけだから、そのことが社史にまつたく現れてこないというのは変な感じですよ。たとえば、一時代の前のブルーバードとコロナ、サニーとカローラという具合に。

この点で言うと、業界のライバル会社のことをよく書いているのは、^{★55}「サッポロビール120年史」という本です。この本では「『スーパードライ』登場の衝撃」という項があります。この項は目次にも挙がっているのですが、他社の商品名をこういう明示的に取り上げる社史は珍しいと思

います。それだけ、この当時のビール業界で、アサヒのスーパードライが衝撃的商品であり、他社がそれとの対抗に苦悩したことが分かります。具体的には、この時代にアサヒはスーパードライ一本槍だったが、他社是对抗のため、多種の銘柄のビールを販売したが、スーパードライに勝てなかったことを率直に記しているのです。

経営史研究における史料整理法

平野 先ほど社史のお話のなかで史料のことが出ましたが、経済史や経営史の研究で用いられる史料についてはどうでしょうか。

宮本 古文書などの史料の取り扱いについては、原田敏丸先生に教えられるところが多かったですね。原田先生は史料の取り扱い作法や、整理には非常に厳格な人でした。阪大の助手時代に、原田先生は史料調査がお好きで、調査のときは非常に楽しんで行っていました。播州の農村の史料調査によく行きました。朝7時に「青屋駅集合」なんてざらで、帰宅は夜11時なんてこともありました。調査先での挨拶の仕方、閲覧許可の取り方、史料整理の方法、マイクロ写真撮影のやり方など、一から教えていただきました。史料の利用についても、出典で、「〇〇市〇〇家文書」と書くだけでは不十分で、〇〇市の何町何番地まで書けとか、

★55 カゴメ株式会社社会対応室100周年企画グループ編『カゴメ100年史』（カゴメ株式会社、1999年）。

★56 サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編『サッポロビール120年史 Since1876』（サッポロビール株式会社、1996年）。

ヒアリングについても、聴取日と記録の有無も記せ、と教えられました。今で言うトレーサビリティのためですね。

それから、文献などのコピーにおいて、分厚い本をコピーするとき、本の真ん中をコピー用紙の真ん中に合わせるのは難しいですよ。私などは乱雑で、いい加減にするものだから、二つに折ったとき、真ん中に文字列があたりするんですね。これで原田先生にはよく叱られました。

「私は紙を真ん中で折って使って、これを全部ファイル化して、本棚に立てることにしている。だから、文字列が真ん中になければならない」というわけですね。先生は、そういう点では非常に厳密な人でした。私は優等生ではなかったけれども、こういった作法というものを教えられたことは大変有り難かったと思います。誰も教えてくれなければ、後になって恥をかくのですから。

調査に行った後は、史料の目録作りをよくやりました。後年、岡部君たちとも史料の目録作りをやったと思いますが、その手法は原田先生から教えられたものです。まず仮カードを作って、それを後で集めて、分類する。その分類にしたがって、目録を作る。目録にしたがって、史料にラベルと貼る。こういう手順は原田先生から教えられたものです。

岡部 私たち自身も資料調査の作法や目録

作成の方法などをきちんと受け継いでいかなくはないですね。

宮本 経済史や経営史をやる人は、若いうちに史料調査や史料の扱い方の勉強をしておくべきでしょうね。若いときにやっておかないと、年を取ってから恥をかくことがありますから。たとえば、古文書を扱うときは鉛筆のみで、かつてはボールペンや万年筆を使っただけでいいと言われましたね。こういったことも作法の一つです。文学部の歴史学の分野ではこれは科目として入っているでしょうが、経済学部や経営学部系では正規科目ではないので、一層、気を付けなければならないことですね。

昔は、ボールペンはぼたぼたしたでしょう。ですからボールペンや万年筆のインクが文書を汚すからよくないと言われていたのです。今は、ボールペンでぼたぼたはほとんどないので、ボールペンでもよいそうです。

岡部 先生の若い頃は、原田先生のOJTではないですけども、「現場」で鍛えられていったと思います。今の学生たち、大学院生に対しては、「資料調査の方法」のような講義を展開しないと、こうしたスキルが伝わっていかないといいでしょうね。

宮本 そうでしょうね。

岡部 原田先生の時代のような農村調査の経験を積むことが必要ということでしょう

か。

宮本 農村でなくてもいいと思います。企業史料調査でいいのです。企業でも史料整理、保存に困っているところがあると思います。史料はあるけれども、きちんと整理できていないというように。そういうところを手伝いに行つてあげる。農村調査もそういう意味もありました。こういう機会を捉えて訓練するのもよいと思います。

平野 それも経営史家の一つの役割ということなのですね。トレーニンングも兼ねながら、社会的貢献ではないですけども、社史を書いて一つの会社の歴史を残すのも、それから企業資料を整理するのも。われわれ経営史家がやっていくべき一つの社会的貢献というか、役割でもあるのです。

岡部 以前から神戸大学や大阪大学は、企業資料の整理に取り組んできたと思います。

宮本 それは寄贈史料や寄託史料が結構あったからですね。阪大でも作道洋太郎先生も晩年は目録作りを一生懸命にやられましたね。私の父や作道先生が受け入れられた史料で未整理のものがかなりあったので、定年退官するまでに、整理しておく責任があると思われたのではないのでしょうか。鴻池文書、水帳、農村文書などの目録作りをやりました。自分たちの研究と直接関係のない史料も多かったのですが、文書の形態や種類の違いなどいろいろ教えても

らいました。よい勉強の機会だったと思います。



ビジネススクールにおける経営史の役割

宮本 過日、経営史学会で学生セッションというものがあって、「ビジネススクールにおいて経営史をどのように教えるか」というテーマのパネルディスカッションが行われました。⁵⁷ 平井岳哉さんという慶應のビジネススクールで教えている人が、ビジネススクールではいわゆるスキルを教える科目、たとえばファイナンスやマーケティング、統計学とケイパビリティというか、幅広い教養的なことを教える科目があり、経営史はケイパビリティ的なものだと思います。

した。それは基本的に当たっていると思いますが、経営史にも若干スキルの要素もあると思います。資料をどう扱うか、資料から何を読み取るかなどスキルのものもありますね。あるいは文章を書くというのもスキルに属するかもしれません。修士論文などテーマを定めて自分自身で研究して、一つの主張を明らかにするというような長い文章を書くには一定のスキルが必要ですから。

岡部 先生は現在、啓蒙書ともいえる『企業家たちの幕末維新』の刊行や大阪企業家ミュージアム館長など社会貢献的な活動もいろいろとされています。この点も含めて、関西学院に移られてからのビジネススクールの話を少しうかがえればと思います。

宮本 基本的にはビジネススクールだといつて、そんなに変わったわけではありません。ただ、ビジネススクールには、歴史を学ぼうとして来ている人は多くないと思います。ですので、「歴史から何を学ぶか」ということを割合、時間をかけて話しましたね。「歴史を学ぶ意義はどこにあると思いますか」と聞くと、多くの人は、現在とよく似た過去の出来事を学ぶことによって、現在への示唆や未来への手掛かりを得ることができると答えるでしょう。これは教訓的歴史観と呼ばれるもので、「歴史は繰り返す」という歴史観が背後にあります

ね。将棋や囲碁で、過去の棋譜を勉強するのと同じ意味です。これが歴史を学ぶことの一つの意味であることは確かですが、プロの歴史家はこういう歴史観をあまり好まないと思います。そうではなくて、現代に生きるわれわれが、あるいはわれわれの社会がどのようにして生まれ、育ち、今長い歴史の流れのなかでどのような位置にあるのかを知ることには歴史を学ぶことの最も重要な意義があると考えているでしょう。たとえば、現在起こっている現象を、過去の歴史的経緯を無視して解釈すると、とんでもない間違いをするかもしれない。アメリカの歴史家ポール・A・デービッドは『私たちの住む世界が理屈にかなっているかを明らかにするためには、それがどのようにして成り立ってきたのかを理解しない限り不可能な場合がある』⁵⁹と書いていますね。ですから、歴史というのは広い意味では、そういう間違いを起こさないように勉強するという意味があります。

歴史小説の読者の多くは教訓的歴史観で歴史を楽しんでいるのではないのでしょうか。⁶¹ 司馬遼太郎さんの本を経営者がよく読んでいるというのは、そこに自分を置き換えて、自分だったらどうしようか、自分の今いる状況下において歴史上の人物だったらどうしただろうか、そのヒントが歴史のなかにあると考えているのではないのでしょうか。こういった歴史の学び方というか、

★57 平井岳哉（ひらい・かくや）。獨協大学経済学部教授。専門は日本経営史。

★58 『企業家たちの幕末維新』（メディアファクトリー、2012年）。

★59 ポール・アラン・デービッド（Paul Allan David）。アメリカの経済学者。

★60 “Clio and Economics of QWERTY.” *The American Economic Review*, Vol.75, No.2, May 1985.

★61 司馬遼太郎（しば・りょうたろう）。小説家、ノンフィクション作家、評論家。『梟の城』で直木賞を受賞。代表作に『竜馬がゆく』『燃えよ剣』『国盗り物語』『坂の上の雲』などがあり、戦国・幕末・明治を扱った作品が多い。

楽しみ方を決して否定しませんが、こういう歴史物を書くのにわれわれは比較優位がありませんね。われわれが書いたものより小説家の書いた歴史の方が面白いし、役に立っているようです。この点、やはりわれわれもある程度反省しないといけないのかもしれません。

平野 文章力などの問題。

宮本 確かに文章力の問題がありますね。歴史を正確に分析することは重要ですが、文章力や説得力もやはり無視できませんね。

ビジネススクールにおける経営史という点でも一つ。経営史学会のパネルで、平井さんは、ビジネススクールに来る人は現代のことに関心をもっているのだから、あまり昔の話よりも最近の話をするべきだと言いました。それは一理あることだけれども、しかし、ビジネスパーソンが本当に現代のことばかりに関心をもっているのかどうか。対象が古いか新しいかということよりも、テーマの方に関心があるのではないかと私は申しました。

関学のビジネススクールの企業経営史という科目で、私は、江戸時代の三井の大元方、明治期の会社法成立当時の株式会社、あるいは戦前の財閥を取り上げ、日本における所有と経営の分離に関する考え方や慣行、コーポレート・ガバナンスの歴史の話をして、それらと今日の日本の株式会社

における所有と経営の問題、コーポレート・ガバナンスとの関係について論じましたが、これらに対するビジネスマンの食いつきはよかったと思います。楽天、ソフトバンク、ユニクロなどは取り上げませんし、企業家論でも、渋沢栄一や伊庭貞剛などを対象としています。逆に言うと、楽天やソフトバンク、三木谷浩史さんや孫正義さんの話だったら、今の経営学をやっている人の方がはるかにアドバンテージがあるし、学生であるビジネスパーソンの方が詳しいかもしれない。ヒストリアンにはアドバンテージがあるとは思えない。そのあたりは、それに得意な先生に任じた方がよいと思うのです。

岡部 得意分野によって、すみ分けた方がいいということでしょうか。

宮本 すみ分けた方がいいですね。もっとも、まったく歴史家しか関心をもたないようなテーマはやめた方がいい。たとえば、昔、経済史で一大テーマであったマニユファクチャー論争とか、日本資本主義論争なんて、ビジネススクールで今やっても意味がないですね。明治時代の企業家はどこからやってきたか、という出自論争も、単なる出自論だけでは意味がなく、企業家のエトスや経営思想との関連で論じるべきでしょうね。そうするとビジネスパーソンにも関心あるテーマとなる。

岡部 題材は新しくなくてもいいということ

とですか。

宮本 題材は古くてもいいのではないのでしょうか。江戸時代に享保時代、1720年代に大阪で懐徳堂という学問所ができました。これは住友や鴻池など裕福な町人五人がお金を出し合って創った商人の子弟のための学校でした。したがって、懐徳堂は日本最初のビジネススクールと言ってもよいと思うのですが、それを言うと、文学部系の儒学を研究している先生は「冗談じゃない、懐徳堂は、商家の子弟が生徒であったとしても、金儲けのテクニクを教えているビジネススクールのような下品なところではない」とおっしゃった(笑)。懐徳堂はそんな実用的な学問を目指したのではないということなんです。ところが他方で経営学者に懐徳堂のことを言うと、「ビジネススクールは、懐徳堂のような儒学の訓誥学を教えるところではない。実学中心だ」とおっしゃるんですね。

私は両方とも間違っていると思うんです(笑)。ビジネススクールを、金儲けのテクニクを習得するところと持っているのは間違いだし、懐徳堂で教えられた儒学を実務に無用な訓誥学と考えたのも誤解ですね。懐徳堂は読み書き、算盤や会計技術などを教えたわけではなく、商人になる人にとって基本的素養となることを身に付けさせようとしたのです。つまり商家のOJT教育ではできない教育をやるうとし

★62 宝永七(1710)年に設置された、三井全事業の統括機関。大元方は現代で言えばホールディングカンパニーに当たり、三井の資本・各店舗・事業を共有財産として統括する持株会社のような存在。

た、実務的ではないが実学的なことをやるうとしたと言えるのです。今日の日本のビジネススクールもこの懷徳堂のスタンスに学ぶべきところがあると思います。広い意味では、長い目では、役に立つけれども、すぐには役に立たないかもしれない。「すぐに役立つことはすぐに役立たなくなる」。

平野 そうなると、ビジネススクールでも、やはりケイパビリティの方も同じぐらい重要視しておく必要があると思います。

宮本 そうですね。もちろんスキルも大事なのですが。ケイパビリティは重要で。ビジネススクールに来ている人は企業で学べないことがあるから来ているわけでしょう。企業で学べることだったら来る必要がないわけです。学校でしか習えないスキルもあるだろうけれども、ケイパビリティは一層、企業では学びにくいのではないのでしょうか。

ただ、言うっておかなければならないことは、経営史など、どうせ役に立たない学問だから、学生に媚びる必要はない、学生が関心をもつかどうか、そんなことには超然として授業を進めればよいという考え方は賛成しませんね。すぐには役に立たないだろうが、やはり究極的にはどこかで役に立つてもらわないと、そういうスタンスで臨むべきでしょうね。

ビジネススクールに限らず、明治以降、

教育改革というものをずっと見ると、やはり経済社会が変わるときに教育改革が行われていると思います。日本のビジネスパーソンの教育というのは、基本的にはOJTでやられていると思うのですが、OJTだけではうまくいかなるとき、学校に期待するということになるのだと思います。うまくいかなくなるのは、ものすごく技術や知識が変化するときですね。今日の専門職大学院や社会人教育が期待されているのはそういうところだと思います。企業は今までOJTや研修をたくさんやってきたけれども、いまや研修などをやる余裕がなくなりましたし、OJTだけではうまくいけません。ですから、今度は産学共同という学校の役割に期待するということになったのだと思います。ですから逆に言えば、企業でできることなら大学でする必要はない。経営史などそういう風に捉えた方がいいと思います。

「1からの経営史」の編集を終えて

廣田 今回は「1からシリーズ」という、フォーマットに合わせて編集、執筆をいただいたのですが、経営史のテキストとして実際にお使いいただく先生方からするとうなのでしょうか。

宮本 多分、経営史は人によっても教える方、内容が非常に違うと思うのです。したがって、先生によっては、自分が取り上げ

ているテーマがこの本に入っていないということがあるかもしれません。とくにこの本では、時代別に言えば相対的に新しいところに重点を置いて、第一次大戦以前のところが薄いです。今日の多くの大学でやられているより現代史のところが分厚いと思います。

岡部 経営史では、未だに戦前を対象にする研究者が若手を含めて多いと思います。ただ講義をする場合は、経営史、経営史を問わず、戦後についてもきちんと教えずにはならない。私の周囲の反応ですが、この『1からの経営史』は、自分の得意分野でない時代、対象が取り扱われていて、使いやすい、便利だとの声が多いですね。

宮本 最後、最近のことに関しては、ちょっと迷ったところがありました。グローバル経営や海外進出企業の話を取り上げることができませんでした。

平野 国際経営ですね。

宮本 また、新しいビジネスとして、最近のITビジネスも取り上げることができませんでした。15章という制約ではやむを得なかったと思っています。ですから逆に一つ提案したいのですが、例えば20章立てぐらいにして、教える人がそのうち15章を選ぶというスタイルにできないかと。

廣田 15章、きつちりではなくてですね。

宮本 20章ぐらいにしておいて、先生が好みの組み合わせで使ってもらおうという手も

あるのかなあとということ。ただ、もう少し分厚い本になってしましますが。経営史はさほど体系がきっちりした学問ではありませんから、こうしたスタイルがなじむかもしれません。

岡部 ピックアップして使うスタイルもいいですね。

廣田 使い方とすると、そういう使い方が圧倒的に多いし、使いやすいということなのでですね。

宮本 かもしれませんね。経済学のマクロやミクロのように非常に体系がはっきりした分野では、大体誰がやっても同じようなフォーマットになると思いますが、経営史や経済史は人によってものすごくフォーマットが異なると思いますね。

平野 この目次を作るときも、いろいろな大学のシラバスを見て、そこでよく取り上げられているものをピックアップして、平均的に並べているという感じなので、微妙なラインで落ちたものも相当あるのです。そう考えるとやはり20章ぐらいにして、選択できる余地というのが、分野によってはあってもよいと思います。

廣田 そうすると、やはりそちらの方が現状に合っているというお話ですよ。

岡部 他方で、『1からの経営史』の一つの「売り」は、第一章で江戸時代、第二章で企業家を取り上げている点です。この二つは、戦後をメインに研究している人か

ら見ると教えるにくいところだと思います。しっかりと教えるにはかなりの労力が必要になるわけですが、それぞれコンパクトに一回の講義で押さえたいところを、きちんと押さえているという点で、このテキストの魅力の一つになっているのではないのでしょうか。

平野 触れないわけにもいかなければ、触れる分にはこれくらいということでしょう。

岡部 そうですね。また教える立場としては、この『1からの経営史』の対になるような、外国経営史のものがあると、授業を展開する上では面白いですね。今、経営学部だと、「日本経営史」「外国経営史」のように分かれているところは少ないと思います。「経営史」という一つの科目を、前期と後期で「経営史1」、「経営史2」という形で展開している大学が多いのではないのでしょうか。私も専門外で外国経営史を教えなければいけないときに、こういう形のものがあると大変便利だと思います。それもとえばピックアップする形のもが一番助かりますね。

本日はどうもありがとうございました。

インタビューー略歴

岡部 桂史（おかべ けいし）

1974年生まれ。

立教大学経済学部准教授、博士（経済学）

2004年 大阪大学大学院経済学研究

科博士後期課程修了。名城大学経済学部准

教授、南山大学経営学部准教授を経て、

2015年より現職。

専攻は、日本経済史、日本経営史。

主な著書に、『植民地台湾の経済基盤と産

業』（共著、日本経済評論社、2015

年）、『戦前期北米の日本商社』（共著、

日本経済評論社、2013年）など。

平野 恭平（ひらの きょうへい）

1979年生まれ。

神戸大学大学院経営学研究科准教授、博士

（経営学）

2008年 神戸大学大学院経営学研究科博

士課程後期課程修了。

2008年より現職。

専攻は、日本経済史、日本経営史。

主な著書に、『産業経営史シリーズ3 織

維産業』（共著、日本経営史研究所、

2013年）。

事務局

廣田 章光（近畿大学 経営学

部 教授）

清水 信年（流通科学大学

商学部 教授）

対談後記

この対談では、宮本先生のこれまでのご研究に加えて、多くの社史に携わってこられたご経験や、ビジネススクールでの経営史教育についてのお考えなど、これまで耳にしたことはあっても、文字として残っていなかった貴重なお話をおうかがいすることができた。対談を振り返ってみると、教育面のお話しをもっとうかがいたかったように思う。大学で教える私たちとしては、若い学部生たちに、経済史や経営史の魅力をどうやって伝えたらよいのか、大学院で研究者を目指す学生たちを、どのように指導したらよいのか、まだまだ先生から引き出したいことがたくさん残ってしまった。

対談の契機となった『1からの経営史』の企画・編集過程を振り返ってみると、私たちにとって、先生から多くのことを学ぶ機会の連続であった。全体の構成から各章著者のドラフト原稿に対する修正コメントなど、私たちが行き詰まる度に、経済史・経営史・企業者史、それも近世から現代までの幅広い知識に基づいて、さらには経済学や経営学といった関連領域のことも踏まえて、的確なご指導とご助言をいただいた。その的確さに圧倒されながら、さすが先生と頼ってしまっていた。仕事の後の食事の場でも、先生のご専門だけにどまら

ない、様々な話題が次から次へと出てくる引き出しの多さに、ただただ驚くばかりであった。対談でも触れられているが、「若い間は、先生や先輩から言われた仕事は断るな、全部引き受けろ」を実践し、「芸域」を広げることの重要性を、身をもって知ることになった。

また、社会科学の中で歴史を教える・研究することは、単に歴史が好きだからというだけではすまないことも改めて考えさせられた。先生がおっしゃられているように、歴史を学ぶ意義は、現在を理解するために過去を学ぶことにある。この対談の中でも、またいくつかの仕事で一緒にさせていただいた中でも、先生は、過去と現在を結ぶことを意識されていたように感じる。それが、社会科学の中で歴史を教える・研究する者が自覚しておかねばならない点であるように思えた。

この対談の中で感じたことは、幅広い視野と長期的な視野を身につけることの重要性であった。それは、自分の研究を深める・広める上で有益なだけでなく、歴史を教える際には、現在のことに関心が強い若い学生たちにも歴史の大切さや面白さを伝えることを可能にするのではないだろうか。これからも「すぐには役に立たない

だろうが、やはり究極的にはどこかで役に立ってもらわないと、そういうスタンス」を忘れずに経済史・経営史の研究・教育に向き合っていきたい。

(岡部・平野)

1からシリーズ

	1からの流通論 石原武政・竹村正明 (編著)		1からのマーケティング (第3版) 石井淳蔵・廣田章光 (編著)		1からの戦略論 嶋口充輝・内田和成・黒岩健一郎 (編著)		1からの会計 谷武幸・桜井久勝 (編著)
	1からの観光 高橋一夫・大津正和・吉田順一 (編著)		1からのサービス経営 伊藤宗彦・高室裕史 (編著)		1からの経済学 中谷武・中村保 (編著)		1からのマーケティング分析 恩蔵直人・富田健司 (編著)
	1からの商品企画 西川英彦・廣田章光 (編著)		1からの経営学 (第2版) 加護野忠男・吉村典久 (編著)		1からのファイナンス 榊原茂樹・岡田克彦 (編著)		1からのリテール・マネジメント 清水信年・坂田隆文 (編著)
	1からの病院経営 木村憲洋・的場匡亮・川上智子 (編著)		1からの経営史 宮本又郎・岡部桂史・平野恭平 (編著)				

碩学叢書

	マーケティングクリエイティブ (1巻) 石井淳蔵・大西潔 (編著)		病院組織のマネジメント 猶本良夫・水越康介 (編著)		百貨店のビジネスシステム変革 新井田剛 (著)		国際マーケティング 小田部正明、K・ヘルセン (著) 栗木契 (監訳)
	メガブランド 張智利 (著)		[新訳] 事業の定義 デレク・F・エーベル (著) 石井淳蔵 (訳)		セールスインタラクション 田村直樹 (著)		ことばとマーケティング 松井剛 (著)
	新しい公共・非営利のマーケティング 水越康介・藤田健 (編著)		企業変革における情報システムのマネジメント 依田祐一 (著)		よみがえる商店街 畢滔滔 (著)		

碩学舎ビジネス双書

	商業・まちづくり口辞苑 石原武政 (著)		ビジョナリー・マーケティング 栗木契・岩田弘三・矢崎和彦 (編著)		旅行業の扉 高橋一夫 (編著)		コトラー8つの成長戦略 フィリップ・コトラー/ミルトン・コトラー (著) 嶋口充輝、竹村正明 (監訳)
	寄り添う力 石井淳蔵 (著)		グローバル・ブランディング 松浦祥子 (編著)		医療現場のプロジェクトマネジメント 猶本良夫・永池京子・能登原伸二 (編著)		愛される会社のつくり方 横田浩一・石井淳蔵 (著)
	SNSで農業革命 蓮見よしあき (著)		明日は、ビジョンで拓かれる 石井淳蔵・栗木契・横田浩一 (編著)		人事よ、ススメ! 中原淳 (編著)		医療イノベーションの本質 クレイトン・M・クリステンセン、ジェローム・H・グロスマン、ジェイソン・ホワン (著) 山本雄士、的場匡亮 (訳)

SBJ 碩学舎ビジネス・ジャーナル

- | | | | |
|--|---|--|--|
|  <p>vol.1
商業を捉える論理
石原武政・水越康介・西川英彦</p> |  <p>vol.2
「創造的瞬間」とは何か？
石井淳蔵・水越康介・西川英彦</p> |  <p>vol.3
マーケティングの論理
嶋口充輝・水越康介・西川英彦</p> |  <p>vol.4
事業の定義復刊の意義
石井淳蔵</p> |
|  <p>vol.5
欲望とは何か
田中洋・水越康介・西川英彦</p> |  <p>vol.6
データをマッサージする
中西正雄・川上智子・石淵順也</p> |  <p>vol.7
日本の管理会計：「数字への
こだわり」とインターラクシ
ョンが創造性を生み出す
谷武幸・窪田祐一・廣田章光</p> |  <p>vol.8
碩学アーカイブ 石原武政-1
石原武政</p> |
|  <p>vol.9
碩学アーカイブ 石原武政-2
石原武政</p> |  <p>vol.10
碩学アーカイブ 石原武政-3
石原武政</p> |  <p>vol.11
日本のコーポレート・
ガバナンスを問う
加護野忠男・山田幸三・吉村典久</p> |  <p>vol.12
碩学アーカイブ 石原武政-4
石原武政</p> |
|  <p>vol.13
『1からの病院経営』
刊行にあたって
木村憲洋・的場匡亮・川上智子</p> |  <p>vol.14
『セールスインタラクション』
の刊行にあたって：営業が生
み出す消費欲望とは？
松井剛</p> |  <p>vol.15
碩学アーカイブ 石原武政-5
石原武政</p> |  <p>vol.16
『新しい公共・非営利のマー
ケティング』の刊行にあたって
水越康介・藤田健</p> |
|  <p>vol.17
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「日本企業の多角化と企業価値に
関するパネルデータ分析」
池田雄哉</p> |  <p>vol.18
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「後発企業のネットワーキング戦略
-北海道におけるワイン・クラス
ターの競争逆転-」
長村知幸</p> |  <p>vol.19
碩学アーカイブ 石原武政-6
石原武政</p> |  <p>vol.20
消費者行動研究と戦略論を
つなぐ
和田充夫・新倉貴士・水越 康介</p> |
|  <p>vol.21
最終講義「マーケティングと消
費者行動」
池尾恭一</p> |  <p>vol.22
1からの経営学部
伊藤貴見・岸本のぞみ・久野恵理
子（法政大学経営学部 西川英彦
ゼミ チームローニーズ）</p> |  <p>vol.23
『よみがえる商店街：
アメリカ・サンフランシスコ市
の経験』刊行にあたって
畢滔滔</p> |  <p>vol.24
『寄り添う力：マーケティング
をプラグマティズムの視点か
ら』刊行にあたって
石井淳蔵</p> |
|  <p>vol.25
1からの学生生活
坂田菜・上田将迪・中野海地
（関西学院大学 石淵順也ゼミ
チームSUN）</p> |  <p>vol.26
1からの学生生活
松原悠・佐藤あゆみ・井上恵夢
（一橋大学 松井剛ゼミ）</p> |  <p>vol.27
第2回碩学舎賞一席
「デザインと技術：製品の意味の
革新に対する技術の貢献」
後藤智</p> |  <p>vol.28
第2回碩学舎賞二席
「既存事業の成長と顧客資源の
活用」
渡辺紗理菜</p> |
|  <p>vol.29
第2回碩学舎賞二席
『古楽』市場の生成過程における
音楽学研究与演奏実践の協働」
飯島聡太郎</p> |  <p>vol.30
1からの学生生活：
大学生活×きっかけ
小澤修平・鎌田浩平・小林悠一
（首都大学東京 水越康介ゼミ）</p> |  <p>vol.31
＜閉ざされた社会＞と＜開か
れた社会＞-変化の認識論
小坂井敏晶</p> |  <p>vol.32
消費者を捉える論理と
マーケティング戦略
池尾恭一・新倉貴士・木村浩</p> |
|  <p>vol.33
第30回電気通信普及財団賞テレ
コム社会科学賞（入賞）
『企業変革における情報シス
テムのマネジメント-ISのフレキシ
ビリティと戦略的拡張性-』受
賞にあたって
依田祐一</p> |  <p>vol.34
国民経済的関心からの
経済・経営史研究
宮本又郎・岡部桂史・平野恭平</p> | | |

SBJ-碩学舎ビジネス・ジャーナル- vol.34 (2015年5月14日発行)

「 国民経済的関心からの経済・経営史研究 」

宮本 又郎 (大阪大学 名誉教授)

岡部 桂史 (立教大学 経済学部 准教授)

平野 恭平 (神戸大学大学院 経営学研究科 准教授)

Online edition : ISSN 2187-0845

碩学舎の会員になりませんか？

碩学舎の教員会員ページでは、大学・専門学校の教員の方へ向けて「1からシリーズテキスト」を使った講義に役立つ資料や情報をお届けしています。

※教員会員ページにはログインが必要です。教員会員資格は、大学・専門学校の教員および博士課程の大学院生の方に限ります。

株式会社 **碩学舎**
Sekigakusha

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町2-1 木村ビル10F
フリーダイヤル 0120-778-079

碩学舎公式サイト

<http://www.sekigakusha.com>

Facebook

<https://www.facebook.com/sekigakusha>